『劔岳 点の記』をよりよく理解するための解説

それからの柴崎芳太郎（上）
―国内測量の日々―

㈳日本測量協会
瀬戸島 政博

はじめに

吉川英治の大作『宮本武蔵』は，船島（巌流島）の対決で巌流佐々木小次郎を破り，再び小船に乗って去るところで物語が終焉となる。しかし，武蔵の生涯はその後も長く，有名な『五輪書』は晩年に書き残している。いわば，「それからの武蔵」の日々があった。

それと同様に，柴崎芳太郎の生涯は，1907（明治40）年7月の劔岳登頂で終焉したわけでなく，「それからの柴崎芳太郎」の日々があり，それがどのような生涯であったのだろうか，大変興味をもつところである。

柴崎芳太郎（図－1）は，1876（明治9）年に生まれ，1938（昭和13）年に亡くなっている。劔岳登頂はまさに人生の半ばであり，約30年間の半生が残っていた（表－1）。

図－1　柴崎芳太郎
（1911（明治44）年頃）

そこで，本稿では，1907（明治40）年以降の柴崎測量官の国内測量の日々（1916年まで）について，陸地測量部時代の機関誌などから紹介したい。しかしながら，収集可能な当時の資料等には自ずと限りがある。限られた資料等に基づく論考であることをご容赦頂きたい。

1. 劔岳測量登山を終えるまで（1904～1907年）

柴崎芳太郎は，陸地測量部修技所の第12期生として1904（明治37）年12月に卒業し，翌年には三河・美濃・信濃方面の三等三角測量に従事した。

1906（明治39）年には越前方面の三等三角測量に従事し，同年9月からは劔岳およびその周辺の下見をした。柴崎測量官が下見をしていた前年には，東京飯田橋の富士見楼では小島烏水を中心とした7名からなる日本山岳会（当初は山岳会と呼ばれた）が結成された。

柴崎測量官による劔岳測量登山がなされた1907（明治40）年度の陸地測量部三角科の部署表によれば[1]，同科第四班に測量手柴崎芳太郎の名前がみられ，第四班は三四等三角測量を主に能登・越中・越後を担当し，4月中旬に出発，10月下旬に帰京，11月上旬～翌年3月下旬までが内業とされていた。この部署表には，小説『劔岳 点の記』に登場する水木輝や勢榮三の名前もみられる。

2. 東北地方の三角測量（1908～1910年）

この頃の柴崎芳太郎の仕事は三五会会報*)に詳しい。劔岳及びその周辺の測量作業を終えた翌年の1908（明治41）年には，岩代（福島県）・越後（新潟県）地方の三四等三角測量を担当していた。その出発日は，「本年度ノ作業ニ付基線測量一等，二等，三四等三角測量及ビ一等二等水準測量臨時務ノ諸氏ハ左ノ如ク東京出発各受持地ニ向ハル」と書かれ[2]，柴崎芳太郎の場合は，明治41年4月15日と記載されている。また，その帰京は，「三角科ノ各班員ハ外業ヲ結了シ左記ノ通リ帰京セラレタリ」とされ[3]，帰京日は明治41年11月8日と記されている。この約7カ月間に柴崎測量官は，越後・岩代地方に47点の三角点を設置したようである。

1909（明治42）年は，羽前（山形県）・羽後（秋田県）・陸前（宮城県）・陸中（岩手県）が第四班の担当地域であり，柴崎芳太郎は羽前・羽後を担当し，三等三角点を38点設置したようである。4月上旬に出発し，帰京日は，三五会会報によれば[4]「三角科第四五班ノ各員ハ外業完成シ左記ノ

如ク帰京セラル」と書かれ，10月13日と記されている。秋田県雄勝郡院内町大字下院内の常盤館を根宿として測量作業に従事していた[5]。

1910（明治43）年は，陸前（宮城県）・陸中（岩手県）の三四等三角測量を担当した。4月上旬に出発，10月中旬に帰京予定であった。柴崎芳太郎は陸前を中心に三等三角点41点を設置したようである。

3. 北海道地方の二等三角測量（1912～1913年）

1912（明治45）年は，7月30日に明治天皇崩御により年号が大正となった。この年の4月2日に会名を三交会として[6]，これ以降，「三五会会報」に替わり「三交会誌」**[)]となった。

柴崎芳太郎は1912（明治45～大正元）年からは北海道の北見・天塩地方の二等三角測量に従事し，二等三角点を17点設置したようである。同年4月28日には名寄地方の下川町に二等三角点「珊瑠山」を選定し，5月中旬～下旬にかけて下川町に東接する西興部村，興部村に二等三角点を選定した。

これらの観測は概ね10月下旬に終了させたようで，二等三角点「片渓」の観測が10月27日であったことが点の記に記載されている。

また，1913（大正2）年には，十勝・日高地方の二等三角測量に従事した。襟裳岬に近い浦河地方の様似町付近から作業を開始し，隣する浦河町，三石町など日高山脈の西側地域の二等三角測量を実施した。

表－1　柴崎芳太郎の系譜

西暦	和暦	主な測量業務実績等（「　」は主な紀行文・日誌）	主な出来事等
1876	明治9	山形県大石田町で生まれる	1877年西南戦争
1896	明治29	台湾守備隊に志願入隊	1894～1895年日清戦争
1904	明治37	12.陸地測量部修技所卒業	1904～1905年日露戦争
1905	明治38	三河・美濃・信濃方面の三等三角測量	9.5日露講和条約調印
1906	明治39	越前方面の三等三角測量，剱岳下見	8.1関東都督府官制公布
1907	明治40	剱岳及び周辺の三等三角測量，小説『剱岳　点の記』の舞台	足尾・別子銅山暴動，小学校令改正（6年制）
1908	明治41	越後・岩代方面の三四等三角測量，「出張ニ於ケル見聞ニ就イテ」	11.吉長・新奉両鉄道の続約調印
1909	明治42	羽前・羽後方面の三等三角測量 「剣山ニテ獲タル錫杖ニ就テノ考証」，「院内の銀山に就いて」	7.6閣議，韓国併合の方針を決定 10.26ハルピンで伊藤博文暗殺
1910	明治43	陸前方面の三等三角測量	7.4第二回日露協約調印
1912	大正1	北海道北見・天塩方面二等三角測量	7.30明治天皇没，大正と改元
1913	大正2	北海道十勝・日高方面二等三角測量，「アイヌの伝説」	2.10桂内閣総辞職，10.5満蒙5鉄道協定
1914	大正3	愛知三重岐阜滋賀の二三等三角改測，「関ヶ原の古戦場」	8.23第一次世界大戦に参戦
1915	大正4	北海道及び千島の一等三角測量 「関ヶ原の古戦場」続き，「千島択捉ノ近状」	5.7対華21カ条の要求，12.4東京株式市場暴落（大戦景気のはじまり）
1916	大正5	北海道石狩・北見方面二三等三角測量 「千島択捉ノ近状」続き	7.3第三回日露協約調印
1917	大正6	測図演習で静岡県古奈地方へ出張 支那出張（5/31～11/15），叙勲八等瑞宝章	ロシア革命（二月革命・十月革命） 9.12金貨幣・金地金輸出取締令
1918	大正7	シベリア出征（？），叙従七位勲七等	ブレスト・リトフスク条約，8.2シベリア出兵
1919	大正8	シベリア出征（～4/22），北海道釧路三等三角測量	パリ講和会議，ヴェルサイユ条約 五・四運動，中国国民党成立
1920	大正9	台湾台中二等三角測量	株式市場暴落（戦後恐慌）
1921	大正10	台湾台北二等三角測量	1922.6.24シベリア派遣軍撤退
1923	大正12	台湾台南二等三角測量	9.1関東大震災
1924	大正13	台湾台北二等三角測量	1925.3.19治安維持法成立
1933	昭和8	病気で官を辞する	1931.9.18満州事変勃発
1938	昭和13	1.29　肺炎のため死去（享年64）	4.1国家総動員法公布

4. 二三等三角改測（1914年）

1914（大正3）年の「大正三年度作業部署表」によれば[7]，柴崎芳太郎は長らく所属していた三角科第四班を離れ，第三班となり，二等，三等三角改測を担当した。この時の測量師の欄には，後年，日本の写真測量の草分けとなる木本氏房が工兵中尉として名を連ねている。4月18日の三角科命課によれば[8]，「第三班附計算掛ヲ免シ第一班附二三等三角改測掛ヲ命ス」とされ，柴崎芳太郎は三角科第一班に配属となった。さらに同日に「二，三等三角改測ノ為愛知，三重，岐阜，滋賀四県下ヘ出張ヲ命ス」と下命された[9]。岐阜県不破郡垂井町扇屋方を根宿に二三等三角改測作業を実施した。

柴崎芳太郎はこの間，関ヶ原の戦いのあった古戦場が改測地域のほぼ中心に位置していたため，三交会誌第11号，第14号，第17号に『関ヶ原の古戦場』と題する紀行文を発表した[10]。主要な三角点と東西両軍の武将たちの陣地と関係づけて関ヶ原附近の地勢を記載しているところには測量官らしさを感じる。

5. 千島択捉島測量（1915年）

三交会誌第19号によれば[11]，4月19日に「右一等三角測量ノ為北海道ヘ出発ヲ命ス」の下命を受けている。この時は千島択捉島での一等三角測量であったようで，三交会誌第20号に『五月二十三日柴崎芳太郎君択捉通信』と題する短報が掲載され[12]，三交会誌第22号にも「八月一日柴崎芳太郎君択捉通信」が掲載された[13]。

千島地方の五万分一基本測図は，1912（明治45）年から千島北端の占守島から着手し，逐次南下して1917（大正6）年まで継続実施された。1918（大正7）年から4年間は中断されたが1922（大正11）年までに国後，択捉，色丹その他の諸島を測図し，全域103面の測図を完了した。

6. 再び北海道での二等三角測量（1916年）

1916（大正5）年の三交会誌第28号をみると[14]，柴崎芳太郎は三角科第三班に所属し，石井英橘工兵大尉を班長として，北海道方面の二等三角測量を担当した。柴崎芳太郎は再び北海道の二等三角測量作業に従事し，石狩・北見地方の二等三角点を11点設置したようである。

三交会誌第33号によれば[15]，「田邊，柴崎両測量手ハ二，三等三角測量ノ為第七師管下ヘ出張中ノ処田邊測量手ハ十月六日柴崎測量手ハ同十二日何レモ帰京」と記載されている。

おわりに

本稿でも紹介してきたように柴崎芳太郎は数多くの紀行文などを残している。その多くは，三五会会報や三交会誌などに掲載されていたため一般には目に触れられることは少なかったが，それらの文章を詳細にみると，大変な文筆家であったことがよく分かる。とくに，出張先の紀行文が多く残っているのは，その土地の人たちの協力を得るために見聞を深めた結果なのであろう。機会をとらえては学校や青年会などで測量の重要性，三角点の維持保全の必要性，地図の話，登山の知識普及などについて講演したようである[16]。

『それからの柴崎芳太郎』，その前半は中部地方以北の国内測量の日々であり，遠く択捉島までの測量作業であった，そして，その後半は満洲（中国東北部），蒙古，シベリア，そして台湾の外邦測量に明け暮れる日々となる。

なお，本稿作成にあたり，数多くの資料のご提供を頂きました国土交通省国土地理院総務部広報広聴室日谷仁英室長並びに平井英明地図測量広報相談官には厚くお礼申し上げます。

［補足説明］

＊）**三五会会報**：陸地測量部三角科三五会発行の月刊誌，陸地測量部三角科職員の交誼を保持し知識の交換を図るために明治35年4月に三五会が結成され，その機関誌として「三五会誌」が発行された。後に『三五会会報』と変更された。

＊＊）**三交会誌**：陸地測量部三交会発行の月刊誌，三五会会報が三角科のみの会誌であったため，さらに取り扱う範囲を拡大し，陸地測量部の三角科・地形科・製図科の三科の総合的研究親睦会「三交会」の機関誌として『三交会誌』が発行された。大正2年から同12年まで発行された陸地測量部始まって以来の部報であった。

［参考文献］

1）～5）陸地測量部三角科三五会：三五会会報第11号，第22号，第28号，第40号，第34号

6）～9）陸地測量部三交会：三交会誌第1号，第8号，第9号

10）柴崎芳太郎（1914～15）：関ヶ原の古戦場，三交会誌第11号（pp.16-19），第14号（pp.36-42），第17号（pp.81-82）

11）～15）陸地測量部三交会：三交会誌第19号，第20号，第28号，第33号

16）柴崎芳博（1979）：一測量官の生涯－柴崎芳太郎伝－，国土地理院広報第129号（1979.3.15），pp.3-7.